（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和６年４月８日

県立厚木高等学校長

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（３月 22 日実施）	総合評価（３月 25 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①探究的な学びをとおした科学的リテラシーの育成、グローバル教育の研究、思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業研究と進学実績を導き出せる教育課程の研究を行う。 ②主体的に学ぶ態度の育成をとおして生徒の一人ひとりのキャリア形成に必要な自己決定力を向上させる。	①SSH の取組の柱である課題研究の充実により、根拠に基づいて論理的に考え、判断し、自身の考えを的確に表現する力を培う。 ②授業の組織的な改善により、新学習指導要領が示す指導と評価の一体化を更に推進し、生徒が自身の能力の向上の見通しを持って主体的に学ぶことで生徒の学力及び進学実績の向上を図る。	①課題研究に係る評価方法を検討し改良することで、課題研究を通して身に付けさせたい資質・能力のより効果的な伸長を図る。 ②授業改善のテーマを「教科横断的な深い学びの実践」と定め、全ての教科指導を通じて、様々な情報を活用しながら課題の発見・解決や社会的価値を創造する力を育む。	①評価方法についての検討がなされたか。 ②７月、12 月の「生徒による授業評価」の質問項目３「生徒の主体的・対話的で深い学びを促す機会が設けられているか。」と質問項目７「既習事項と関連させ、教科横断的な学びができているか」についての肯定的な回答の割合。	①「知の深化と融合による深く思考する力の育成」のもと、「深い学びの実現」や「探究的な学習」の実践による組織的な授業改善を推進し、すべての教科で教科横断的な深い学びに資する授業の展開及び探究を取り入れた授業が実施されていることがわかった。 ②授業互見期間では、SSH 科目のヴェリタスⅠ～Ⅲの見学を必須とし、教科・科目の垣根を越えて相互に授業を見学した。公開研究授業を２度実施し、前期に実施した研究授業後の協議内で提案された内容を即座に後期の授業に生かすことができた。また、生徒による授業評価において、探究のプロセスに基づく授業を展開していたかを問う質問項目をはじめ、全ての項目において昨年度の調査結果を上回る結果が出た。	①実験デザイン力の比較が、新課程の３つの観点との比較検討が不十分であったため検証できていない。次年度は３つの観点で比較可能であるため有意な差があるように生徒の能力を伸ばしたい。 ②教科間の連携を強めることで生徒の主体的な学習活動が活性化すると考えられるため、クロスカリキュラムやカリキュラムマネジメントを整理する必要がある。 ②公開研究授業にSSH運営指導委員や県内SSH指定校の教員の参加を呼びかけ多くの有識者が参加したことで、高校教育における探究を取り入れた授業について研究協議を通して深めることができた。また、年２回実施したことで、１回目の課題を改善し、２回目の研究協議ができたことは非常に効果的であった。	・目標はおおむね達成されている。 ・すべての教科で教科横断的な深い学びを実践できたことは評価できる。また、次年度に向けた課題が明確であり、次に期待できる。	・課題研究に係る授業を全職員で見学し、内容や生徒の取組状況を共有することができた。また、公開研究授業の対象としたことで、校内外からの意見を踏まえ、成果と課題を確認することができた。 ・全教科で方向性を揃えた授業改善に取り組むことができ、その成果を生徒による授業評価で確認することができた。	・課題研究の授業を２時間連続とし、その効果を確認する。 ・引き続き、全職員で目線を揃えた授業改善に取り組み、その成果を見取る。
2	生徒指導・支援	①生徒が自らを律し、また、全体のために行動しようとする態度を育成する。 ②学業と課外活動等との両立を図り心身ともに健康でバランスの取れた学校生活に向けた組織的な支援体制を確立する。	①学校行事や部活動、委員会活動を通して、生徒の主体性、社会性、リーダーシップとフォロワーシップを育む。 ②個別の支援が必要な生徒の情報共有の機会を増やすとともに生徒の心の悩みについて早い段階で対処できる体制を構築する。	①行事や部活動等を通して、目標や身に付けたいことについて、取組の前後で振り返る機会を複数回設け、生徒に自身の変容を確認させる。 ②個別支援フローチャートを踏まえ、今年度から毎週来校する SC、SSW のより良い活用を検討する。	①年度末の生徒の振り返りにおける、肯定的な回答の割合。 ②SC、SSW のより良い活用ができたか。	①振り返りアンケートを戸陵祭体育部門と文化部門後に行った。 ②「かながわ子どもサポートドック」の実施過程で SC や SSW との連携を強化し、支援が必要な生徒に対する早期のプッシュ型面談を行った。	①大方良好であったが、文化部門での会計方法については今後キャッシュレス化を検討し前向きに実施したい。 ②生徒に対する具体的な支援の内容やメンタルケアの方策について、SC や SSW からの助言に加えて職員研修を実施する等、学校全体でのスキルアップを目指す。	・目標はおおむね達成されている。 ・行事の後の振り返りアンケートを実施し良好な結果が得られたことは意義がある。課題確認ができているので問題ないが、常に改善点に目を向けることが必要である。	・学校行事の振り返りアンケートを行っているのはよいが、目的を明確にし、その実施による生徒の変容を測れると、より成果が上がると考えられる。 ・個々の生徒に丁寧に対応できたが、学校として更にスキルアップしたい。	・生徒に、事後のみでなく事前に行事の目的を意識させる工夫を考える ・生徒支援に関する職員向けの研修を実施する。
3	進路指導・支援	①主体的な学びから進路決定に結びつける進路指導の実現と各種模擬試験等の分析結果を活用し、生徒が設定した進路の実現に向けて、最後ま	①進路支援グループの主導により、３年間を見通したキャリア教育実践プログラムを全職員であらためて共有し、その実践による生徒の変容を	①キャリア教育のプログラムを適切に用意し、生徒に目的を理解させて取り組ませ、実施後の振り返りにより、自身の変容を確認させる。	①生徒の自己評価による、自身の取組状況や成果についての肯定的な回答の割合。	①進路行事の事前事後指導により、行事の意味をとらえることを意識した。また、模試では自身の取り組み状況を振り返り、今後の目標等を立てる機会とした。それらの取り組みにより、知の探究講座の事後アンケートや、キャリア	①進路行事等を繰り返しブラッシュアップすることで、より生徒が自身の将来を考える上での契機となるようなキャリア教育プログラムとしていく。 ①生徒の進路志望への動機づ	・目標はおおむね達成されている。 ・生徒の進路支援のため、様々な対応が取っていることは評価できる。生徒が希望する進学先が多様化して	・生徒の進路実現に向けて、進路行事や進学指導、学習指導を丁寧に行うことができ、成果につなげることができた。しか	・進路行事のブラッシュアップを図る。また、今後更に成果を上げるために、足し算ではない取組を検討し

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 22 日実施）	総合評価（３月 25 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		で諦めさせずに維持させ、高い進路実績を維持する。	検証する。 ①生徒に自身の進路目標と現状の確認を定期的に継続して行わせ、進路実現に向けた計画的な取組を促す。	①実力テスト等の前後で日頃の学習を振り返り、次の取組につなげる機会とする。また、キャリアパスポートの活用方法を見直し、効果的に活用する。	①国公立大学合格者が 150 名、難関国公立大学合格者が 20 名を超えたか。	パスポートへの記述などでも多くの生徒から肯定的に自己評価する声が聞かれた。 ①国公立大学入試がまだ終わっていないため、合格者数での評価はできないが、国公立大学を第一志望としている生徒は共通テスト時点で 242 人おり、高い志望を持てるような動機づけができていると考えられる。 ①外部機関の連携による講義実習（ヴェリタスツアー）等 19 のイベントを企画実施し、一年生を中心に述べ 148 名の生徒が参加した。 ①33 の校外発表に２年生を中心に延べ 278 名が参加した。	け、模試やその事前事後指導、授業がそれぞれ改善されることで、生徒の高い目標に対する進路実現を目指さなければならない。 ①１年生を中心に早期に本物に触れる体験（ヴェリタスツアー）を通して、キャリア育成に効果があるかを経時的に検証する必要がある。 ②２年生を中心に校外発表（学会、コンテスト等）を通し、キャリア育成に効果があるかを経時的に検証する必要がある。	いる可能性もあり、海外の大学を希望する生徒がいるのかも知りたい。 ・相談体制の一層の強化、充実を図ってほしい。	し、足し算による取組は限界にきている。 ・SSH 事業の一環として、またそれ以外のものも含めて、様々な学会等での発表、外部の施設や企業の見学や実習に多くの生徒を参加させることができた。	ていく。 ・引き続き、生徒が校外で主体的に活動できる場を用意し、その効果を検証していく。
4	地域等との協働	①学校の教育活動を広く地域に公開・発信し、開かれた学校づくりを推進する。 ②地域や学校間と連携した教育活動を推進する。	①校内の教育活動についてこまめに記録を取り、適時に発信していく体制を構築する。 ②地域と連携した教育活動について、どのようなことができるか検討する。	①ホームページを隅々まで確認し、未更新部分をすべて更新する。その後も適時更新されていくように、各ページに関わる部署は速やかに HP 担当者へ情報提供する。 ②学校運営協議会の「生徒・地域部会」により検討する。	①学校行事、各部活の活動、SSH の活動などの発信状況。HP の更新状況。 ②活発な協議ができたか。新しい取組ができたか。	① HP の更新をこまめに行い、既存ページの改良、新たなページの作成などにより、様々な情報を見やすく発信した。 ①HP の SSH 国際のページでは、１年間で約 40 記事を作成更新した。生徒の振り返りも含め、外部に当校の取組を伝える媒体として作成した。 ②厚木市主催の小学生向け科学実験イベントに参加した。また、地域交流イベントを企画し、近隣の小学校の放課後理科クラブにおいて、本校生徒が講師として参加し、出張サイエンス教室を開催した。	①今後も本校の魅力と特色が伝わるように、HP を利用した外部への速やかな情報発信を心がける。そのため、広報用の写真撮影などもこまめに実行し、ストックしていく。 ①SSH 国際ページを生徒に作成させるなど、生徒目線の伝え方も必要である。 ②地域連携（小学校、自治体等）の連携において持続的可能な取組を実施する中で、年々質を高める必要がある。	・目標はおおむね達成されている。 ・HP の SSH 国際ページは厚木高校の特色ある部分であり、引き続きレベルアップを図っていただきたい。 ・生徒の様子を見る機会がなかった。次年度は生徒を見て評価したい。	・まず HP の整理に着手し、更新をしっかりと行うことができた。 ・特に SSH 国際のページは速やかに更新し、内容的にも充実したものとなった。 ・コロナ禍が収まり、地域の小学校との連携を深めることができた。	・HP による本校の魅力、特色の発信、地域との連携は引き続き工夫して行っていく。 ・学校運営協議会の委員に、生徒の様子を実際に見ていただく機会を設けていく。
5	学校管理 学校運営	①信頼にねざした学校づくりにむけ、事故防止の取組みを推進するとともに学校全体の企画調整機能を強化し、経営課題を横断的かつ組織的に検討し、教育活動の展開・拡充させる。 ②教職員一人ひとりのワークライフバランスの調和を目指した働き方改革を推進する。	①企画会議において学校経営の視点で課題を見つけ、グループの枠を超えて協議をし、本校の目指す教育の効果的な実践につなげる。 ①創立 120 周年記念式典及びその他の記念事業を円滑に実施する。 ②業務の精選、見直しを継続して行っていく。	①企画会議を活用した不祥事防止会議を毎月行う。 ①企画会議で事故や不祥事の芽や学校の課題を洗い出し、改善・解決に向けた意見交換を積極的に行う。 ①創立 120 周年記念式典に向けて最終調整を綿密に行う。 ②企画会議でグループ業務の内容や位置付けについて見直しを続ける中で業務の軽減を図る。	①事故防止会議の実施回数と事故不祥事の回数。 ①学校経営に係るテーマについて協議がされたか。 ①120 周年記念事業が無事に実施できたか。 ②業務の軽減につながる見直しができたか。	①事故防止会議 12 回。うち 1 回は５年経験者による事故防止研修会を実施。 事故不祥事は０回。 ①企画会議では、今後の学校目標を検討する中で学校経営の視点から協議を行うことができた。 ①120 周年記念式典に向けて入念に最終調整を行い、無事に実施することができた。 ②各グループ内での業務の精選を行った。	①今年度の若手職員による校内研修会のように、職員が企画するなど毎月の事故防止会議が、より自分事となるような工夫をしていく。 ①今年度は次期４年間の学校目標を策定する年度であったため、今後の生徒像、学校像を企画会議や学校運営協議会であらためて考えることができた。次年度以降はその目標達成に向けて、グループの枠を超えたよりよい具体的な取組を考えていく必要がある。	・目標はおおむね達成されている。 ・120 周年記念式典に出席したが、素晴らしい内容であり高く評価できる。	・事故不祥事防止の取組は行ってきたが、引き続きしっかり行う必要がある。 ・それぞれのグループ内で考えている業務を、グループを超えた視点で検討、調整する必要がある。	・事故不祥事防止会議の在り方を検討し、職員一人ひとりが自分事としてとらえられるよう工夫する。 ・各グループでやりたいことを足し合わせるのではなく、企画会議が学校運営の視点をもち、全体調整を図っていく。